

大教室で次の授業が始まるのを待っていると、前に座っていた女の子がぐるりと振り向き、遠藤くんの顔を見た。

「ペン貸して！」

遠藤くんの目、鼻、口は盛大に引きつった。

ペンを他人に貸すのがすごくすごくごくごくイヤだったのだ。

豊永さんの頭の中には「ペンを貸したくない」という概念がなかったので、急に話しかけられてびっくりしたのかな？と小首を傾げただけだった。バイトして買った中古のモンブランを貸すわけにはいかない。遠藤くんは大慌てでペンケースをノートの下に隠した。他に、何か、どこかに……カバンと服のポケットを引っかきまわす。ペンを持ってない、とウソがつけるほど、遠藤くんは器用ではなかった。

あっ！指先が手帳に差しているペンに触れた。ラミーのサファリ。これだって大事なペンだが（大事じゃないペンなんてない！）モンブランほど高価ではない。

「はい」

遠藤くんが差し出したサファリを、豊永さんは無造作に受け取った。

「ありがと！」

「万年筆だから、筆圧かけないで」

「ヒツアツ？」

「優しく書いて」

「やさしくう〜？」

豊永さんのからかう口調に、遠藤くんは真っ赤になった。

「万年筆は、繊細で……」

「大丈夫！ 前におじいちゃんのを壊したから分かってる〜」

それ全然大丈夫じゃない…… どんなに真面目に暮らしていても、突然の不幸に見舞われることもあるのだと、遠藤くんは青ざめながら学んだ。

「助かった！ ほんと、ありがと〜」

豊永さんが返したサファリのキャップを開け、遠藤くんはペン先を上げしげと眺め、ノートに

「永、永、永」と書いた。

「壊してないってば！」

「うん、壊れてない」

遠藤くんは安堵のため息をついた。

「何書いたの？」

「ドイツ研修旅行の申込書。今日締め切りなのに、エンピツ不可でエーツ！てなって」

豊永さんは住所、氏名を書いた紙を遠藤くんの前に出した。「豊永」の「永」の字の、トメ、ハネ、ハライの美しさに遠藤くんは目を奪われた。豊永さんの字はタテ線がまっすぐで、全ての字がびんと背筋を伸ばしているようだ。

「字、綺麗だね」

「意外だっけよく言われる」

遠藤くんは万年筆を愛しているのに悪筆なのがコンプレックスだったから、ペンケースでノートを隠した。そんな動作など全く気にせず、豊永さんはサファリを再び手に取って、キャップを開けたり閉めたりした。

「ドイツ研修、僕も申し込んだ」

君はどうしてドイツに興味を持ったの。僕は子供の頃、ナチスの軍服を格好良いと思ってしまっ、もちろん歴史を知った後で反省したけれど、僕あの「格好良い」という感情は……

もちろんこんなややこしい気持ちも、遠藤くんは口に出せない。

「この万年筆、格好良いね」

豊永さんは遠藤くんのノートに *Das ist ein Stift.* と書きながら言う。

「あ〜っ 勝手に！」

「なんて表現したら良いんだろ、大昔の映画の、近未来みたいなデザイン」

「それ、ドイツ製だよ」

「えっ！ じゃあドイツ行ったら買う！」

「日本でも売ってるよ」

「本場で買うことに意味があるんじゃない」

「ドイツ行くの、楽しみだね！ 私、海外初めて」

豊永さんと遠藤くんは、世界のこと互いのこともまだ全然知らなかった。でも知るための時間と能力は、無限にあるような気がしていた。

(おわり)

豊永さんと遠藤くんが最初に私の頭の中へ来てくれた時、COVID-19 はまだこの世に存在していませんでした。「ペンを貸したくない」というのも、今だと感染を恐れているように読めてしまうかもしれません（万年筆オタクが他人にペンを貸さないのは、書き味が変わる可能性があるため）ドイツ研修旅行は中止でしょうし、そもそも授業はオンラインで、大教室でのおしゃべりなんて出来ませんよね……

ファンタジーか、過去か未来のお話として読んでください、とお願いしなければ成立しない。こんな他愛ないショートストーリーが実現不可能になってしまった世界に、衝撃を受けました。

柳屋文芸堂

Twitterアカウント @yanagiyamanpuku

作品置場 <http://yanabunn.seesaa.net/>

ブログ <http://yanabunn2.seesaa.net/>

作品置場は主に小説、ブログには旅行記、本やアニメの感想、料理の話などを載せています。Googleで「柳屋文芸堂 作品置場」「柳屋まんぶく堂」と検索すれば出てくるので、見てもらえたら嬉しいです。

第4回 ペーパーウェル 2020年6月6日 配信

Made in Germany